校友時報

昭和45年10月29日
編集人兼発行所
秋田県能代市追分町4番26号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所 大勝堂印刷所

十里強歩が再開される

3年間の中断をこえて

◎…　十里強歩が復活した。交通事情の悪化などの理由でここ三年間は中止されていたものだがそれにかわるものが他になく、年中行事のゆくえが心配されていたが、是非復活を！という生徒、先生、父兄等の熱意によりついに決行された。…◎

九月十九日午前零時、薄い雲の中からぼうっと浮き出る仲秋の名月を真上に眺めながらまず三年生の一団が正門を出発した。それにおくれること二〇分、一年生が出発し、さらに一〇分おくれて二年生が正門をあとにした。八九四名参加による第十六回十里強歩の始まりである。今回のコースは正門を出て大内田を通り相染森を越え、鵜川まで行き、少しもどって森岳へ抜け金光寺を通り仁井田に出て、また大内田まで行き、同じ道を正門までもどるという交通の混雑を極力避けたものだった。以前は国道を通ったのである。ただし四二年から四四年までは中止になり、また四一年は鶴形、富根、常盤を通るコースであったので結局は四〇年までのコースが以前のコースということになる。

天候は、と言えばあまりめぐまれた方ではなく、前日（十八日）の昼すぎまで雨が降ったりやんだりというおもわしくない状態にあったのだが、夕方になるにつれ天気も回復し、出発するころにはところどころに水たまりがあったりはするものの、なんとか薄ぐもりにまで持ちなおしてくれた。以後はしだいに晴れ、朝はさわやかな秋晴れの下で迎えることができた。途中でのハプニングを二つ三つ紹介すると、とにかく四〇キロを通ればいいという気楽な気分で出発したためか、まだ一〇キロも進まないうちに弁当を広げる者がいたり、ハーモニカを持ち出して仲間同志で歌をうたって歩いたり万才を叫んだりする者もいた。また、あきかんをひきずって歩く者がいたかと思うと道路にすわりこんで弁当を食べたり、また道端で四、五人がかたまって眠ったり、大きな葦をかついで歩く者がいたりして、いろいろ変な者も多かった。

今回の十里強歩の目的が、「四〇キロを歩きとおすほどの強健な体力と精神力をつける」ということから、より多くの生徒が四〇キロをいわゆる「完歩」することを目標としたため順位は一切つけないし、誰が何時間かかって何時に着いたなどということも発表されなかった。そしてその「順位は問題にしない、全員がゴールインを」という趣旨は見事に貫かれた。

参加生徒八九四名（ただし男子のみ）のうち、落伍者はわずか二名だけ、体を悪くした者はなく八九二名全部が午前八時の締め切りまでにゴールインするというかってない立派な成果だった。参考のため前回のデータをあげてみると、四〇年の十四回のときは一、〇三四名が参加（女子も含む）して落伍者は三六名、また三九年の十三回では一、〇〇九名参加で落伍者は六〇余名に上った。同じ四〇キロである。これは四〇キロ強歩を競争にしたせいもあるだろう。あまり記録にこだわるのも趣旨に反するが今回のトップは一年生であった。トップだけでなく上位は一年生が独占した。最高ラップは三時間二〇分。（大会記録は二時間五七分、四〇年第十四回にて）最終到着はゴール締め切りの午前八時ジャストであった。

学生のみせ
キムラヤ
畠町
2-5535

部説

朝鮮人問題を考える

九月二六日、在日朝鮮人の外国人登録証国籍欄を「韓国」から「朝鮮」に訂正することを希望する五二人（北海道の帯広、北見、赤平、夕張、三笠、旭川、釧路の七市から）について書き換えがおこなわれた。これらの人たちは口々に「これで名実とも朝鮮人として胸を張って生活できる」とか「長い間の肩の荷がいっぺんにおりたようだ」とその喜びに浸っている。しかし、戦後から、いやそれ以前から彼らは「第三国人」とか「朝鮮人」と呼ばれ、極端に差別されてきた。その最たるものは、大正十二年の九月一日に起った関東大震災であろう。政府は治安維持のためとうそぶき、「朝鮮人が井戸に毒を投げ込んだ」「暴動をおこそうとしている」「放火殺人」「泥棒」「婦女子強姦」といった数々のデマを意識的に流し、軍隊と自警団（民衆からなる組織）が検門をおこなって、六千人をこえる朝鮮人を大量虐殺した。また敗戦の混乱期に在日朝鮮人のだれもが露店での闇売買をやっているように流布し、はては彼らを連想させるポスターをつくり、デカデカと「犯罪撲滅週間」の文字を各所に掲げ、彼らを犯罪者扱いにし、不逞の徒輩・無法者・与太者・法秩序の紊乱者であることを、その当時の日本社会は信じ込ませようとしたのである。そしてそれは確実にかつ加速度的に彼らの骨身に突き刺ったのであった。

そんなむごたらしい差別を被った彼らは「昔のことなんてしゃべりたくねえ」とか「他人のことだと思って」と筆舌に尽し難いような怒りをむきだしにする。彼らは私たちが測りしれない残酷な差別をうけ、彼らの潜在意識の中に深く被差別感がくい込んでしまっている。それを取り払わなければならない日本人が彼らの被差別者意識を異常に助長してきた。

朝鮮人、中国人を扱った劇画＝小学館『少年サンデー』＝のおとこ道に対して「日本朝鮮研究所」の抗議文をここに掲げよう。

「当時の在日朝鮮人や中国人がどのような歴史的経過で、日本に居住するようになったと心得ているのだろうか。敗戦当時、日本に居住していた多くの在日朝鮮人・中国人は、植民地支配と侵略戦争によって強制的、ないしはなかば強制的に日本に連行されてきた人たちとその子供たちで、日本帝国主義の犠牲者以外のなにものでもない。（朝日ジャーナル、10・11号より抜すい）

在日朝鮮人問題に対する私たちの無知、無関心を呼び起す彼らの声が聞えてくる。「俺たちは三国人ではない！」と。在日朝鮮人差別は私たち日本人がばらまいた種子である。私たちが刈らねば……（二G 佐藤 稔）

後期生徒会長に 山須田君

昭和四五年度の後期生徒会正副会長選挙は九月二八日、集会が終った後各教室で投票が行われた。

今回の選挙は会長に二年D組の山須田武光君が立候補した他は対抗馬もなく、また副会長への立候補者は一人もいないというまことにわびしいかぎりの選挙であった。そのため投票は山須田君の信任不信任を問うだけという形で行われ、投票に際してもそう時間がかからなかった。

結果は文化祭も終わった十月十三日にはり出されたが、投票総数九九一票のうち、信任は四八〇票不信任は四六五票でわずか一五票という票差ながら信任された。

今回の選挙は去年の後期役員改選からみればはるかにスムーズに事が運んだ選挙であったと言えそうだ。しかし、その裏には毎年と寸分違わない問題がひそんでいる。一、〇〇〇人の中でほんとうに山須田君を知っていて投票した人が何人いたであろうか。それと立候補者が少ないことである。能代高校は人材不足か？いやそんなはずは決してないのである。

今もなお副会長の椅子が空席である。この選挙にみるように生徒会活動もその正常化を願うには楽観は許されないようだ。

当選　山須田武光

信任	四八〇票
不信任	四六五票
投票総数	九九一票
無効	四六票

時評

科学文明を告発する

理科　**北川和子**

交通戦争、産業公害、種痘禍、保健薬から食品汚染、ABC兵器、情報公害とざっと並べてみただけでも現代社会に山積みする問題の中で科学に直結しないものはない。中には遺伝子合成、人工臓器の開発、コンピューターの普及等、人類の未来に微笑を投げかけるかに見える科学の成果もある。しかし、科学のもたらす恩恵よりは科学文明の破壊力と人間性への圧迫が人類の生存を奪おうとする危険性の方がはるかに大きい。

現在まで科学は中立とされ、科学を技術として駆使する人間こそ問題であると言われてきた。しかし、政治や経済の論理をつきぬけて浮かび上ってきたのは人間の欲望であり、エゴイズムであったと思う。生理学者であり、哲学者だったカレルが「人間生命への無知が人類文明の特徴である」と言う様に人間は自己の生命を知らないばかりか、自分もその一員である生物集団の母体である地球と宇宙についても知らなすぎたのではあるまいか。そこから人間のエゴイズムを無制限なまでに許すという文明の論理が組み立てられていったのである。しかし生命や宇宙の理解については学者たちは医学や生理学、動植物学、天文学等の成果を指摘して反論するだろう。だがそれらは知識的知識にすぎず、それらの学問が究明した世界は精神医学で人間の精神さえも物質化してしまうようにあらゆるものを容体化し、物質化した死の世界であり、そこには生命が生息していても生きた生命の姿はなかったのだ。このような生命の価値観を持たない人間は欲望のおもむくままに自然を変えてきた。今、心ある人々は生命や地球等を生の観点から究明することを望んでいる。

故アインシュタイン博士は、「今日の社会はあまりにも科学が発達しすぎた。今はこれを使いこなす精神文明が発達しなければならない。私はそれを東洋に期待する」とのべている。今こそ生命を直視し、生命自身の内部から生きたものの論理をひき出し体型づけた哲学が必要な時期ではなかろうか。

論点

▼とかく人間は窮地に立たされると何かに頼ろうとするものである。受験勉強や十里強歩でもその傾向が見られた。▼十里強歩でのあの長い孤独の中で友人に会うなどということは砂漠の中のオアシスのようなもので大きななぐさめであり、寂しさから抜け出す機会であった。しかし、なぐさめはやはりなぐさめで一時的なものであり、なぐさめだけで孤独から抜け出すことはできない。それができるのはいわゆる「根性」や「忍耐」という精神力である。「孤独」は人間の最大の窮地であり、それからどう抜け出すかで人間の価値が決まる。▼今日、大人たちは無造作に「今の若い者には根性がない」などと言う。彼らは戦争という大きな試練を乗り越えて今日を築き上げた自信からそう言えるのだろうが、我々戦後派、昭和二世にはそのような大きな試練は自分でつくり出す以外にないのである。その自らつくった試練が受験であり、十里強歩であった。▼根性とか忍耐などということばを辞書でひいてみると、いかにもあっけなく、根性とは気質、性根だとか、忍耐とは耐え忍ぶこと、我慢することなどというようにしか載っていない。しかし、辞書にあるようにそんなに安易に口にできるような簡単なことばではないはずだ。というより、我等十代はそれを自分自身の体で知るために、そんなことばや文字などではあらわしたりするべきではないのだ。▼ずいぶん気軽に「根性」とか「忍耐力」などということばを口にするようだが、それはこれから社会に巣立ち、その中で生活しつづける我々にとって「孤独」という大きな試練に対抗できる最大の武器なのである。▼「孤独」に負けて敗北者となってしまうことのないよう、それを乗りこえるための根性と忍耐力を自分自身の体をもって身につけておくために、我々は今のうちに大いに試練を求めようではないか。

メガネ・ペン
カモヤ　畠町 T 2―3740

◎毎日の健康管理に
純正クロレラ（保健食品）を◎
塚本薬局
畠町 T 2―5144（代）

時計に
あなたの個性を
吉田時計店
柳町 T 2―5573

紅葉の美しさを
カメラでバッチリ
○カメラの十ケ月払い
フサオカメラ店
畠町坂上 T 2―5703

食欲の秋に
エーワンのパン
直伝長崎カステーラを
A・I
上町 T 2―2343

◇スポーツの後に
明治牛乳を一本！◇
菅原牛乳店
通町 T 2―3851